

民友社と不知庵

——内田魯庵傳ノ一ト——

野村 喬

一 國民新聞社員時代

明治二十三年二月一日、欽定憲法發布から約一年後、最初の衆議院選舉を期して國民新聞は發刊された。文藝欄の中心的な柱として蘇峰に迎えられた不知庵の入社最初の仕事は第一號からはじまつた。「島田三郎氏に質す」である。要約すれば——島田三郎がある席上で今日の文學は極衰狀態にあると述べたが、それはまことに奇怪な言と評さねばならぬ。もとより自分とて、今の文學界に、西洋の大文學に匹敵する作品も、大詩人も大批評家も無いことを承知しており、決して黄金時代と稱し得るとは夢にも思つていない。「さればとて、君の如く極衰の暗黒時代と目するに忍びんや。夫れ名匠偉人は猫の兒を生む如く續出するものにあらず、徳川氏三百年間の文學黄金時代と雖ども井原西鶴近松巢林子松尾芭蕉の三傑のみ。然るに僅々數年前より開けたる今の文學界に第一流の大豪傑なしとて極衰なりと慨歎するは眼界の狭き識量の小なる頗る笑ふべ」きことだと。

一見すれば、この魯庵の所論は遊戲文學をきつぱり退けた筈の魯庵と矛盾するようである。前年暮の「小説は遊戲文字にあらず」(前出)で、かれはこう書いた。「極端のリアル派が小説を哲學と並行せしむる一行の學術となさんとするは望ましけれど今日に於て到底行ふべからず。然れども文化文政の戲作時代とちがひ小説は文學の極粹と目せらるゝ今日なれば、昔日の如く遊戲三昧の事業となすことも望ましからず。春の屋主人以來小説家續々發生し、

しかもかの似而非デスレリーは次第に消亡して、今日の小説壇は漸く新小説家の占むる所となれば小説の氣運も又熟せりといふべきなり。然るに廣く世間を見るには小説を遊戲文字として徒らに字句の美に誇り趣向の奇に優ずるエセ文學者もまゝ見ゆるは文界の爲めに歎息すべし。」この文章の意味するところは實に暗示的だとおもう。つまり、第一に似而非デスレリーの政治小説の否定、第二に新文學抬頭の氣運の肯定、第三に文章の枝葉末節を弄する戯作者的態度の否定、これだけをつないでいるのだ。

沼南島田三郎は毎日新聞の社主、民權家であり基督者としての名士である。清徳の君子としても聞えていた。(もつとも、後の魯庵の回顧するところでは、若い頃は折花攀柳と遊んだものだし、贅澤な消費だつたという。)新しい小説が男女間の戀情を主眼として描くをみれば顔を擧めたるうことは容易に想像できるではないか。日頃、文藝の保護者を以て任じた巖本善治にしてそうだつた。その極衰説の出てくるは當然のことだつた。ただ沼南とても、西洋文學についての常識をもっている。それが大文豪、大批評家なしと歎ずるかたちになつたのだ。

ここに魯庵が極衰説に直面して、前述の第二段を極力主張する根據があつた。誤解されるおそれがあるが、魯庵は文壇批評家の立場をもつて反駁したのである。現實の文壇がたとえ遊戲分子に満ちているとしても、なお且つ、新興の小説界を擁護しなければならなかつた。これは矛盾に相違ないとしても、とらねばならぬ兩面作戦であつた。むしろのこと、魯庵は沼南の背後に第一段の似而非デスレリーの氣分をみていたからでもあつた。

さて、魯庵がさきに巖本善治と論戦し、島田三郎と對決したことは、すなわち現に所屬する民友社の統領徳富蘇峰の抱憾する文學理念に暗に背馳すること、蘇峰だけではなく、嵯峨の屋や宮崎湖處子を含めた民友社の空氣ともかけへだたつた場所にあること、それを意味する。^{*1}蘇峰についていえば、明治九年十四歳で花岡山の盟約に加わり、新島裏の感化にキリスト教に接し、のち中井兆民や馬場辰猪に接してマコーレイ、デイスレリー、スペンサー、ミル等のイギリス自由主義思潮の洗禮を受けるといつたように、種々な要素をその個性的な一身のうちに收めた人

物であつた。したがつて、その論ずるところも政治評論にとどまらず、文學にも一家言をもつていた。はやく、「近時流行の政治小説を評す」(二十年七月、『國民之友』六號)は逍遙の神髓の影響下に、政治小説の非寫實的な結構を批判し、政治小説の要は政治の内幕を穿つにあるとみるのだが、半面において、「小説は社會の鑑なり」とも小説には意匠の變化が必要だともいうところに、善治や嵯峨の屋においてみた敎化主義の側面や技巧主義の側面が匂つてゐるものだつた。その後、「インスピレーション」(二十一年五月、『國民之友』二二號)「新日本の詩人」(二十一年八月、『國民之友』二八號)を書いて、エマースンによつて、模寫主義を離れ、宇宙の生命、造物主の眞髓に通うべき神秘的な直觀を待望するに至つた。後年の透谷の文學觀を用意したともいえるものだが、この汎神論は國民新聞紙上でも「天然と同化せよ」(筆名大江逸二十三年四月十三日)に至つて自然讚美の反世俗態度としてあらわれている。が、他面にあつて、「文學者の目的は、人を樂ましむるにある乎」(二十一年一月、『國民之友』三九號)で「世の豫言者、説教者、教師たること」を文學者の目的とすることを忘れていない。これらの諸點はほぼ巖本善治の説と脈絡するものだつた。魯庵が書いた「詩文の感應」(既出)が、陶淵明流の自然觀に裏打ちされる點で、蘇峰とも通うかにみえていたことは事實だが、しかし眞には觸れることのなかつたは善治と同様である。

當時、明治二十三年の一月から三月にわたり、郵便報知新聞は矢野龍溪の「報知異聞」を掲載していた。血氣の日本男兒がイギリス、オランダを相手にインドネシアの經略を試みるといつた冒險小説なのだが、これに接した蘇峰は「『報知異聞』に題す」(三月、『國民之友』七七號)で、明治の『水滸傳』だとして絶讚するといつたことがおこつた。龍溪は明治三十九年改版自序に「當時予は竊に邦人の海事海軍思想の幼稚にして、且つ海外冒險の氣力に乏しきを慨し、多少の刺激を與へんとて起稿せし」と書くのだが、この初版發行に際しては、「野史小説の要は人を悦ばしむるに在り、憂る者は之を樂しましめ、窮する者は之を達せしめ、悶を遣り、鬱を洩らさしむれば、讀者乃ち悦ぶ、堅韌巨礫向ふ所前無く、雄略壯圖異域に横行し、理科學術世人の未だ爲し能はざる所を爲し、遠航貿易遣

利を海外に收む、是れ此書の記する所なり、邦人若し之を讀て而て大に悦ばゞ其の悶鬱の在る所亦知るべきのみ」と記している。私は龍溪の小説が侵略主義的、軍事科學小説だと直ちには思わない、²が、二十年代に入つて、かつての民權家たちが國內から眼を海外に轉じ、かつての夢を歐米列強に對し朝鮮その他の經綸にふりむけたこと、一種の民權的國權膨張主義をはつきりと指摘できるし、龍溪の思想が全く同根のものであることは明白だとおもう。蘇峰の稱讚の理由もそこらにつながるものだが、また「野史小説の要は人を悦ばしむるに在り」にかなうところがあつたとみられる。龍溪の「報知異聞」は『浮城物語』と題を改め、單行された。

このとき果然、魯庵は立つて「『浮城物語』を讀む」(五月八、十六、二十三日)に、龍溪、蘇峰を論駁する。その主張するところは、「余は考ふ、小説は人間の運命を示すものなり、人間の性情を分析して示すものなり」という點から勸懲主義を排し

「浮城物語」何の爲めに出でたるや。若し龍溪居士が胸中に鬱積する不平を洩すに過ぎざれば、是れ政治家の玄關畫が作りし所謂佳人才子的の政治小説と同様にして審美學上論評するの價值なし。若し徒らに讀者を悦ばしむるに止まらしめば忍月居士が評せし如く官本武勇傳と一般にして到底岳亭以上に置く能はず。

と小説の資格を問うて否定し、かえす刃に蘇峰にむかつて

徳富蘇峰氏は明治の水滸傳なりと曰ふ。敢て氏が一答を請はん、氏は水滸傳(施耐庵)の價值を知るか。

ときめつけ、「浮城物語」などは兒供の愛讀書としてしか意味がない、と述べるものだった。こうしてみると、魯庵の追求は一貫して文學の本質の上から攻撃しているとみてさしつかえない。つまり、龍溪が南進主義の國權的主張をもつているイデオロギー的側面を拾象して、その制作態度と作品の價值とにかかわつて否定するということになつてゐる。魯庵があまりにムキになつて書き續けるため、森鷗外や森田思軒が「元より君が長々しき批評に値せず」と言つたそうだが、その感がないわけではない。もし、この推測を許してもらえらば、あるいは、魯庵の

本能寺の敵は龍溪ではなくて蘇峰にあつたのではないか。なぜなら、魯庵がその中で書くところに

余が畏友某氏は曰く理學^{ルイェン}は眞理を研究し詩^シは眞理を説明すと。是れ頗る至言にして、觀察上の觀念^{カニヤン}單小説^{タンショウ}を作るべきなり。輒近最も進歩したる所謂實際的小説は即ち是にして觀念(觀察上)以外に文章もなし脚色もなし。

という箇所がある。畏友某氏とは、おそらく二葉亭に相違あるまい。この箇所が大體蘇峰の説くところに全く違ふことは明白であらうと考える。

やがて、龍溪は文學會の席上で演説を行い、その要旨が「浮城物語立案の始末」として國民新聞に現われた(六月二十八日、二十九日、七月一日)。龍溪の意圖は、これもまた例によつて、文學を詩歌、歴史、小説、漫筆その他一切を含む廣いものと解釋すべきであつて、小説にしても近時流行の戀愛小説だけに限定するのは不滿であつて、こういう種類のものも文學であると示したかつたというのである。これに對して、ふたたび筆をとつて、魯庵が書いたのが「龍溪居士に質す」(七月十五、十六日)で、あくまでも小説の本質を衝いて譲らなかつたが、龍溪が手紙を魯庵におくつて謝したところから論争として發展しなかつた。というより、敵を明確にすることがすでになかつたら立ち消えるのやむなきものだつた。

魯庵が國民新聞に在社したのは、この年の夏までだつた。その主要な活動が、島田三郎批判であり、矢野龍溪論撃にとどまつて、小さな批評文は十餘篇あるが、とくにきわだつたものとしてとりあげる要もない。それでは一體、新聞記者として魯庵はなにをしていたのか。一言でいうと怠けていたのである、遊んでいたのである。入社間なしに「廊下とんび」という筆名を使つたことがあるがその通り、社に出動しては廊下とんび、おもしろくないから、「光風霽月」と洒落て、向島邊を久保田米遷と連れだつて歩き、米遷のスケッチと一緒に「梅見ずの記」(二月)を書いてお茶を濁し、房州を遊びまわつて「安房巡禮」(三月)と稱し(もつとも、この時にドストイェフスキイの「處けられし人々」を携えていつて三日三晩かかつて讀破したという收穫がある)、あるいは小金井をぶらついて「櫻花落後の小金井」

を草するといったノンキさ加減である。ただ新聞人である氣休さで方々へ出かけて『女學雜誌』時代にまして、文壇内外との交際を深めたのがおもしろい。中西梅花、原抱一庵、饗庭篁村とのまじわりもこの時期にはじまつた。森鷗外との初対面のいきさつは、鷗外没後に述懐されているから有名だが、私は今まで發表されたことのない書簡をたまたま發見したから、ことのついでに記そう。

話はこうである。花も散り果て、若葉の青さが目にしみる五月の末の三十日、魯庵は谷中から上野を抜けて東照宮の下に來て、ふつと鷗外の家は此邊だナと思いつき、花園町を歩くと果して森林太郎とある門札をみつけた。名刺を出して案内を乞うと鷗外夫人らしいのが「ドウいう御用ですか？」というので、謝絶されたと思つたか、ムツとして「何の用事もありませんが、そんなら立派な人の紹介狀でも貰つて上りませう」とこたえて去り、下宿（當時の魯庵下宿は神田小川町六八番地大村家之助方）^{*3}へ歸ると早速に「大家を訪ねて會はず」の一文を草し民友社に宛てるべく、ポストに投函した。歸ると机の上に、森林太郎の名刺がある。女中がたつた今おいでになつて、「先刻は失禮した、宜しく云つて呉れ」と言い置きがあつたことを傳えた。魯庵がすぐ原稿の掲載中止を葉書で社におくつたことは當然だが、その翌朝鷗外からの手紙（『鷗外全集』未收）が届いた。その全文は（句讀點、筆者のもの）、

「不知庵君ならむとはおもひもかけず。當面錯過いまさらに奈何にかせむ。何の用かと問はれては當年のミラボオ猶怒りぬ。況や足下をや。紹介狀云々、天晴舌鋒中てられて痛し／＼。さりながら、交淺しとて咎められすは一言せむ。僕の如き迂闊なる男を訪ふをりにはカバンなどは夢々携へたまふな。

五月三十日夜

鷗外

不知庵君 梧下

とあつて、魯庵が袍をさげていたため、寄付金勸誘とまちがえたらしいことがわかる。折返して魯庵が

「來訪又來書辱う存じ候。昨夕不忍池をめぐりて上野の美に感得致し候まま「大家を訪ねて會はず」なる一篇書きつらね候。大抵は明日の紙上に載るべく候まま御覽被下度候。近日再び君が高門を叩きて教を乞はんとす。現代の大家よく乳臭の若少を近接

するの時間ありや否。昨夜君が來たるの前數刻蘇峰君訪はる。彼れ曰く君磊落にして好んで客と語ると。彼の言にして欺かずんば長座席を腐らすの我一癖を許せ。(在宅時間御報知あるべし)

三十一日

不知

鷗外先生侍史

とかきおくり、數日のちには訪ねて、もちまへの長座を發揮したことはない^{＊4}。

魯庵は鷗外を認めなかつたわけではない。認めた證據には、この年の暮に一年を回顧しての「最傑出の作」を國民新聞紙上で選ぶに鷗外の「舞姫」および「うたかたの記」をあげていることから知られる。ただ、どちらかというと、露伴に對する肩の入れようとはちがつたところがあつた。それをついつかり「『うたかたの記』は『一口劍』を下ること數十等」などと一度洩らしたことがあつて、たちまち鷗外は眉を逆立てたのであろうか。「うたかたの記」を讀んで鷗外を罵り不知庵を笑ふ」(『しからみ草紙』十月)と他人に託して(澤水寫という筆名)皮肉たつぶりに應酬するようなことがあつた。魯庵はこれに懲りたであらうし、また現に「舞姫」をめぐつて、江湖新聞に據る石橋忍月を、國民新聞紙上で迎撃する鷗外との論争のすさまじさをみていれば、敢て鷗外と論戦する氣がおきよう筈はなかつたとも思える。なにしろ、ドイツ仕込みの鷗外にむかつて、いかに當年審美學の見地をふりまわしたとしても、鷗外の土俵にひきずりこまれては敵し難いと自認せざるを得なからう。が、魯庵には後年言うように「純文藝は鷗外の本領では無い。劇作家又は小説家としては縱令第一流を下らないでも第一流の巨匠で無かつた事を肯て直言する。何事にも率先して立派なお手本を見せて呉れた開拓者では有つたが、決して大成した作家では無かつた^{＊5}」という可成正鵠を射た評價はすでもちあわせていたとみていい。露伴評價の總決算をついに魯庵は書かなかつた。「露伴が死んだら書くよ」と晩年語つたそうだが、それはついにあらわれなかつた。魯庵が露伴に十餘年先んじて白玉樓中の人となつたからである。

が、當年の魯庵は露伴作品には過褒にすぎる時評をくだした。いわく、『風流佛』は日本文學史中に特筆すべき大文章なり。文字は西鶴より出で、しかも風來の分子を含めば寧ろ西鶴の情を缺くも氣絳萬丈の力あれば、世間通常のエセ文と同様に語るべけんや」(既出)、いわく「露伴の作は純然たる小説(ノベライ)にあらず、若し夫れ文學壇の頂天にあるもの假に詩(シ)と命じ或は小説(ノベライ)と命じ得べくんば此の點に到達せしものにあらず。(中略)葉末集中四種、對偶體を以て壓卷とす(中略)奇男兒又尋常の文字にあらず、第六回の短章餘音翳々として幾回低誦益々深きを覺ゆ。忍月居士は紅葉の關東五郎結尾と對照して甲乙なしといひしかど餘を以て見れば紅葉の及ぶ處にあらず」(既出)、いわく「一口劍は實に兄が一進化を示せし傑作にてよし是を以て失敗の作とするも其善處は中々に他の御作に於て見るを得ざるものと存じ候。」これによつて、いかに魯庵が露伴を評價したかは察せられる。

さて、話は元に戻る。

依然、怠け放題の魯庵は、七月に入つて直ちに旅に出た。とはいつても、新聞が夏場に入つて、各地の山水探訪記事を載せる當時の習慣であつてみれば、魯庵もそれを襲つたに過ぎず、せいぜいが利用したにとどまろうか。中西梅花の筆によると、魯庵は、露伴と梅花と三人が別々の徑路をとりながら、最後に赤城の山麓で落ち合うことになつていたらしい。實際は、露伴が途中で旅をきりあげて歸つてしまつたし、そのあとに梅花が訪れる仕末となり、魯庵は赤城山麓に行かなかつた。というより途中で沈没してしまつた。彼は、まず信州白瀬山温泉に遊び、ついで上州四萬温泉に赴いて羽をやすめた。四萬での逗留は三週間にもおよぶもので、はた目でみたつて呑氣至極といわねばなるまいが、私はただの遊びとはとりたくない。前にも言つた通り、魯庵自身は『罪と罰』に觸れ、二葉亭と接觸するにおよんで、なんとか勉強しなければ——という内心の焦燥感を燃やしていたから、逍遙の神髓流の考え方を克服する見地の獲得をめざすような知識の蓄積と文學觀念の體系化にとつとめようとしていたのだとおもひい。

七月九日付で、白瀬山温泉の魯庵にあてた二葉亭の手紙がこの間の消息を傳える。

むつかしき御尋ね御答に當惑仕候へリンスキーを愛讀したるは四五年前の事ゆゑ今は大抵うろおほえと相成候生憎へリンスキー文集を——肝腎なるは第十二卷なるか——その十二卷目を友人に貸して今は手元に無之取調ること不相叶ゆゑ聊か記憶に残りしところを記せハ

ポエトリとノーヴェルとは仰の如くベリンスキーの見解にては差別あるへき筈無之候もしあれば全體と一部分との差別に過ぎまじく候しかしポエムとノーヴェルとなれば勿論同氏も差別を立て論し申候如何なる差別なりしやは判然記憶いたさず候へとも多分作者のスタンボイントに依る義にやと存候次に詩の解釋いろ／＼あるへけれども小生は知らず況て誰氏のか最も偏僻なりやさらに存じ不申候⁹

というこの一節からも、實にこみいつた質問を魯庵がしていることは想像に難くない。さきにあげた、『葉末集』の批評が詩と小説ということに觸れているのは偶然ではない。魯庵の關心事はしかもこれに盡きていたのではない。『出版月評』三三二號(五月)には「小説史稿を讀む」の一文を魯庵は書いていたが、それにはこうある。

余人なれば兎かう申さゞれども堂々たる關根正直先生が署名したるほどのものにあらざと思はる。先づ小説の起原を論じ巷談其外四類に區分せしは極めて當れるが如けれど未だ到らざるに似たり、次に江戸將軍時代の初的小説傳統を設けしも頗る不完全にして彼此を混合するの難大に多し。第二に沿革總説は批評として價值なきのみならず綱要として缺點多し。殊に最も怪むべきは著者は小説の定義を與へず、變遷の原由を説かず、唯漫然と其種別を擧げざれど異同の點を示さゞれば其效更になし。爰に其改竄を要する缺點を數ふれば

- 第一 著者は小説と社會との關係を説かずし事
- 第二 著者は各作者の特質を示さゞりし事
- 第三 著者は文體の類例を示したれど小説の類例を示さず且引用の文體も未だ其人を代表するに足らざる事
- 第四 著者は近古の作者挿畫に苦心せしを述べながら其苦心せし意匠を縮圖にて示さゞりし事
- 第五 著者は作者の名を羅列せしが毫も其權衡を説かずし事
- 第六 著者は作才の長短を示さゞりし事
- 第七 著者は簡を知つて要を知らざりし事

其他小瑕疵も多かるべく又大長處もあるべけれど余は一回通讀せしのみなれば仔細に點檢するを得ず。唯余は疑ふ、諸新聞雜誌は日本小説の一斑を知るを得べしと贊稱したれど著者は果して日本小説を玩味して著せしものか將た味はずして作りしものか。

引用ながながしきにわたつて申しわけないが、魯庵が所有していた問題意識の一半を示して御承知を願つておく。

さて、四萬温泉の滞在中には、伊勢與として知られた銀座の三枝商店の三枝與三郎に出會ひ、東京人の氣休さと伊勢與の親切にはだされてついうかうかと時をすごし、國民新聞には、この頃「瀧見物」の一文を投じたのみで過すという、新聞記者なるまじきその有様にはいくら人のよい蘇峰もい顔ばかりもしておれなかつたらしい。この旅行の前にも魯庵が小旅行から歸つて出社すると、竹越三又が「之から少し勉強して戴かなくては……」とアテコスリを言つたことがある。

旅行中、徳富君からも、新聞記者たる者の心得は斯うなければならぬといふ長々しい忠告手紙を讀取つた。けれども私は依然として勉強しなかつたので、到頭旅行中、恰も遣ひ果して二分も残らぬ處で突然郵便で免職を申渡され、東京へ歸る旅費も無くて困つて了つたので、據ろなしに宿屋から金を借りて歸京したことがある。私が國民新聞社員であつたのは創立から九月の初め迄漸と半年であつた。

というやうな仕儀になつたことは是非もない。が、たとえこのことがなかつたとしても早晚、退社せざるを得なかつたのは、魯庵が畢竟民友社の空氣とかけはなれていたことからして當然であつた。

蘇峰によれば、魯庵が米遷と組んでものした紀行文は、世間ではいざ知らず社内の評判はかんばしくなかつたらしい。「何は兎もあれ、『國民新聞』の社中は孰れも概して田舎漢にて、君は生粹の江戸兒であつた。國民新聞社中は、殆んど宗教的熱心を以て政治を見、政治的熱心を以て宗教を見た。然るに君は我等の所謂政治や宗教には、左程の熱心は無く、謂はば常識ある文藝至上主義者であつた」と言うのだが、なるほど魯庵も罪な男で寒月から借りた「一代男」を編集局でひろげ、世之介が遠眼鏡で女の行水を二階からのぞく恰好を眞似してみせるのだから、米遷をのぞけば他のだれであらうとカチンときたらしい。

「奇怪千萬な痴れ者」と國民新聞の社員たちを思わせたこういう行動は、もとより魯庵一種のソフィステイケーションとみていいだろう。文藝新聞のごとき觀のある讀賣新聞とくらべれば、國民新聞の社員たちはあまりに洒脱さとか茶目ツ氣がなさすぎる。魯庵のふるまいがそれをあてつけ、わざわざ刺戟しあてこするような趣きを示したとみられるのである。けれども、それだけではない。魯庵自身がやはり江戸ツ子であること、無骨な政治宗教マニアにやりきれなくなっていること、そのデモンストレーションでも半面たしかにあるということも強調しておきたい。

國民新聞社中には、宮崎湖處子もあつた、蘇峰の弟の健次郎(のちの蘆花)もあつた、遅れて國木田獨歩も入る。かれらと魯庵との関係はいかようであつたか。私は、ついに魯庵とかれらとは方眼紙に描かれた双曲線のごとく相交わらざる關係でしかなかつたと、言つておきたい。湖處子、蘆花、獨歩とならぶときいやおうなしにそこにキリスト教に觸れて靈的精神に敬虔な態度、英文學と地方出身とが渾然に融けあつた田園的な香の抒情、それらをひつくるめての浪漫性というものが考えられるのだが、かれらがそこに發見していつた小民への愛情は自己を小なる小なる自我と認識し、大いなる自然に對置する性質をもつていた。こうみることは、決してかれらを不當におとしめることではない。かれらがそれなりに社會への批評をもつていたことは事實としてある。にもかかわらず、かれらは社會を自然の一部として理解するかたむきはどうしようもない。自然法の理念にはまだ遠く、かれらは本能的に不自然な社會、として現實をみつめた。

かれらに魯庵が接觸できるとすれば、魯庵がもつていた自然觀ということになるだろうが、魯庵は靈的一元論による自然觀を本來もつていなかった。後にも書こうと思うが、魯庵の自然はきわめて人間臭い。漢詩漢文學あるいは和歌俳諧の傳統文學の素養、それは陶淵明であつたり物外であつたり芭蕉だつたりしたが、それを通して自然を詠歎的に賛美する傾向があつた。英文學の馴愛、それはゴオルドスミスがもつともよく代表したが、蘇峰をはじめ民友社の若手たちが愛讀するワアズワース、コオルリツジの田園的浪漫主義とちがつて、それに先立つゴオルドス

ミスは古典主義の最後に位置して平明な描寫によつて荒涼たる農村の疲弊をうたつたし、それによつて魯庵が旅を好み自然を破壊する社會を強く意識する傾向が生れた。いづれにしろ、人間から解釋した自然が魯庵にはある。ときに、いわゆる東洋的であり、ときに諷刺的であつても。國民新聞七月七日の記事に、信州からよせた魯庵の「歸省を讀んで」が載つてゐる。それをみると、魯庵の湖處子『歸省』の感想が僅かにアーヴィングのスケッチブックより出でて別な味があると賞するのみで、とおり一遍の世辭に過ぎない。蘇峰が『國民之友』社説に大々的に賞揚したのとは比較にならない。湖處子と魯庵とは二十八年末に決定的に對立するに至る（論争とその余波については後章に述べる）が、それに先立つても魯庵はいかなる意味でも民友社にはもともとふさわしからざる人物であつた。¹⁰

戯文『文學者となる法』にしろされたが「民友社派は平民文學の代表者なり。平民主義とは『Commonerism』の義なれども此社の特色は往々『Vulgarism』と混同するにあり」という感想は、社内の空氣を吸えば吸うほど切實なものであつたに相違ない。些かも洗練されるところのない、野蠻にして卑俗な文學觀、魯庵は蘇峰、湖處子などがワズワースを口にしたとき、口にすればするほど、かれらがワズワースの眞味を理解するに程遠いと思わずにおれなかつたろうとおもう。

二十年代で魯庵がもつとも親しく交際した詩人は中西梅花と戸川殘花とであつた。しかし、魯庵がこのふたりの詩を評價してゐたとはつゆ思えない。魯庵がかれらと往來したのは、かれらが文壇の獨立派といおうか、ともかく誰の輩下にもなかつた氣易さからである。殘花との交友の次第については後に述べるであろうが、梅花について少し觸れておく。奇行をもつて知られた狂詩人梅花は二十一年から讀賣新聞にあつて文藝附録の編輯の任にあたつてゐたが、かれの讀賣入社は鑒庭篁村のヒキによつてであつたから、篁村が讀賣を退き、逍遙と紅葉とそれにつれての硯友社一統が幅を利かすにおよんで、ついに二十三年の五月に主筆高田早苗と衝突したままやめたのだつた。梅花も魯庵と同じく寒月から西鶴本を借覽し、その上に露伴と妙にウマが合つた。そういうところから、自然に魯庵

との往來も生まれて讀賣退社後、もつぱら魯庵の世話で國民新聞の紙面に顔を出すようになった。露伴や魯庵と旅行を計畫したことなどもそのためである。

このことを魯庵の側から言うと、魯庵の交際好きは新聞記者を利用して、一層諸方面へ顔を出すようになった、根岸黨の面々である篁村、思軒、三昧のところに行つて勝手な熱を吹く傾向があつた。紅葉なんかとの交際も表面上は續いていたが、なんといつても舊派文人と往き來するのは、弱冠の魯庵にとつてはけだし得意然たるものがあつたろうと思われ、さらぬだに政治宗教狂の民友社員に對する不滿がそういうところで案外満足されたとも考えられる。それに、根岸黨とはいふもののそのひとりひとは獨立して漠然とした社交仲間であつたことも拍車をかけたのだらう。もちろん、魯庵がこれら詩酒徵逐を事とする雰圍氣にたいする批判はあつたろうが、魯庵の血の中に流れる江戸人氣質は蔽い得ないと私はみている。梅花とのつきあいもそのようなものであつた。

例によつて話をもとに戻したい。魯庵は九月になつて國民新聞から詰腹をきらされた。梅花とは違つたケースではあるが、これによつて魯庵がフリーの状態になつたわけである。このことは、魯庵にとつて二つの意味をもつ。一つは、いうまでもないことだが、固定収入を失つて原稿を賣らねば収入の途がないことになる。一人前の文學者なら、當今では普通のことだが、當時にあつてはかなり困難ともあるいは異常のこととも思える。文筆家がいずれかの雑誌新聞の社員ないし客員たることが常識であつたからである。だが二つには、これは魯庵にとつてさういひしなかつたわけはなく、それまでも民友社の異物たる觀のある魯庵が獨立の立場に身をおいて發言できることになつたことが指摘できる。魯庵は前年、女學雜誌社員として、毎號なにがしかの文章を六號活字で組まれるものを書きすてねばならなかつた筈である。ここにおいてその煩雜が解消したし、『罪と罰』および二葉亭との邂逅以來、頭を領しつゞけた文學研究に専念し得る機會がめぐつてきたのだ。

ただし實際は、魯庵をして一舉に文學研究に沈潜するように仕向けたわけではなかつた。なぜなら、齒に衣着せ

ぬ批評家として注目されていた不知庵が黙つて引込むような具合に論壇が放置しておくわけはなかつたから。現に、正直正太夫といつていた齋藤綠雨などは魯庵が國民新聞を引いたのを知ると、村山龍平の意氣もあつて、早速に魯庵の新聞國會入社勧誘のために訪問するというようなことがあつた。國會というのは朝日新聞の社主村山がはじめた論説中心の大新聞で、石橋忍月、幸田露伴を客員にしていた。初冬の頃、目的もなしに下宿を訪れる綠雨を魯庵は奇異におもつたようだが、時が重なるにつれて綠雨の目的がはつきりしたので、魯庵はことわらないわけにいかなくなつた。というのは、國民新聞の方は退いたが、蘇峰の勸説もあつて『國民之友』の客員にとどまることまではやむを得なかつたからである。^{*12}

蘇峰にしてみれば、社員の不満や非難の種になつてゐる魯庵を新聞から離したとしても、完全に絶縁するには惜しい存在だということは承知してゐたのである。魯庵が亡くなつたとき、怠け者のようであるが、實に生真面目な人と評してゐるのはあたつてゐる。こういうわけで、國民新聞からは魯庵の文章はほとんど見受けられなくなるが、不知庵主人の批評文は『國民之友』に復活し、從來の石橋忍月が占めていた位置を漸次襲う結果となつたのだつた。

註 * 1 徳富蘇峰「文學界の怪事」明治二十三年三月『國民之友』（後、『文學斷片』所収）は参考になる。蘇峰の立場は一見ヌエ的であるが、その眞意は島田沼南と距離遠くない。

* 2 飛鳥井雅道「民友社左派と日清戦争—明治三〇年代社會小説（一）」（昭和三十四年八月『文學』所載）は、『經國美談』を「侵略主義的、軍事科學小説」と規定し、忍月、魯庵がそれぞれ「正面から反對した」と述べてゐるが、まるで幼稚な意見であり、それぞれにつき反對である。むしろ、柳田泉氏の見解が、昭和十五年という時點で書かれながらなおさほどの逸脱もなく正しいといえる。

* 3 伊藤整『日本文壇史』第二卷二七〇頁に、「神田小川町の木村」と書かれてゐるのは伊藤氏のミスであらう。現存する魯庵宛の饗庭篁村、矢野龍溪、松原岩五郎その他からの書簡の宛先（二三—二四年間の）によつて明白。

* 4 森潤三郎「内田魯庵翁と兄隅外と」昭和九年六月『書物展望』による。

* 5 「隅外博士の追憶」大正十一年七月『明星』。

* 6 『二葉亭四迷全集』第七卷所収。

* 7 「二十年前の國民新聞及び其當時の文壇」明治四十三年二月十一日付國民新聞。

* 8 徳富蘇峰「生眞めな人」昭和四年九月『愛書趣味』。

* 9 徳富蘇峰「歸省を讀む」明治二十三年七月『國民之友』八八號。なお、ここで蘇峰は『歸省』が田園生活の秩序が資本主義浸透により破壊されるくだりを讀み來り、「宛もゴルドスミスが荒村感懷の詩を誦するが如く」と言っているがいささか誇張であらう。

* 10 魯庵の「讀詩饒舌」(『國民之友』二六八號)に端を發し、湖處子の「内田魯庵なる者の毀言に就て」(國民新聞一七四〇號)以下のことをさす。

* 11 飛鳥井雅道「民友社左派と日清戦争」(前出)は、從來の「左翼」研究者たちが透谷—嶺雲という奇怪な圖式を批判する視點での立論は興味をもたせるが、遺憾ながらその意見は事實の無視、無知によつてすめられている。矢崎銀四郎・宮崎湖處子・徳富蘆花それに魯庵をひつくるめて「民友社左派」というがごときデタラメであり、「魯庵を『國民新聞』派としてとらえるのは、わたしの判斷であつて(中略)論證は略す」などとはつまるところ論證したくも證據がなく、判斷が臆測にすぎないことにはかならず、かえつて一切の資料は魯庵の思想が民友社のものでも、嵯峨の屋・湖處子などのものでもないことを立證することは、私の示したかぎりでもわからう。なお、嵯峨の屋が「二葉亭四迷の友人」であつたことをなにか意味のあるように書いてるのは困る。前章を讀まれよ。

* 12 伊藤整『日本文壇史』第二卷二七二頁に「内田には『國民新聞』をやめられない事情があつたので」と書いてあるのは、まちがひ。ただし、伊藤氏のこの書は、瑕瑜があるにしても魯庵の『思ひ出の人々』『紫煙の人々』、逍遙の『柿の葉』等を巧妙に驅使して興味深く敘述してある。私が同じことを書くのは氣がひけるため、梅花や綠雨などについては一々しるさない。

二 『國民之友』客員時代

魯庵があらためて客員となつた『國民之友』には、評壇の先輩石橋忍月があつた。忍月が『女學雜誌』を去つて『國民之友』に移つたのは、「鯨鯨の細評」をひつさげた明治二十一年の七月であつた。それ以來、『國民之友』の批評欄は、ながく忍月のものだつた。發行部數三千部以下の『女學雜誌』にくらべるとき、一萬部を數える『國

民之友』とでは影響の程度が違つていたのは當然だつた。

ところが、二十三年二月に國民新聞が發刊されるに至り、魯庵が入社した同じ月に、他方で新たに發刊された江湖新聞があつて、三宅雪嶺の發刊にかかり、忍月が加わつた。「初見の口上」は第三十號（三月十八日）にあらわれているから、魯庵に遅るゝ一ヶ月後である。察するに、雪嶺が敵手國民新聞が魯庵によつて文學評論の面で聲望を得つつあるのを見て俄かに忍月を招いたのではあるまいか。江湖新聞は清新の氣に富む新聞であり、雪嶺および長澤別天[★]がものする文學論はミルトン以下の革命詩人を推賞しながら、愛國的自由主義の雰圍氣をもつた急進的な主張にみるべきものがあつたのだが、忍月にとつては江湖新聞入夥はいささかもプラスするところなかつたといえる。

その失敗の第一は囑外との論戰である。『舞姫』の批評を忍月ははじめ『國民之友』七二號に執筆したが、やがて『舞姫再評』『舞姫三評』『舞姫四評』『舞姫五評』を江湖新聞の四月二十七——二十九日、四月三十日、五月三日、五月五日に發表した。囑外が『しがらみ草紙』第七號に「氣取半之丞に與ふる書」を執筆し、以下國民新聞の四月二十八日、三十日、五月二日、五日、六日にそれぞれ忍月を反駁したことは、舞姫論爭として知られている。

さらに、忍月が江湖新聞に「罪過論」（四月一—三日）を發表したのも囑外によつて「讀罪過論」（『しがらみ草紙』第七號、四月）に論難を浴びて、忍月が戀愛の意義、矛盾葛藤の必然性を提起したにもかかわらず、論理のあやふやな傷をつかれてやすやすと囑外の勝利に歸したことは今日ではあきらかなところである。

忍月失敗第二の點は隱微な面にかかわるが、江湖新聞に走つたことは蘇峰にとつてみれば當面の敵手のところに所屬するものとみなされ、氣まずいものができたということを意味しないわけではなかつたからである。蘇峰の抱く文學觀に對していくちがつたのは決して忍月だけではない。すでにしるしたところでも、魯庵はちがつた態度をとつている。囑外も異つてゐる。また後には、蘇峰と共通する山路愛山に對して批判の立場にあつた北村透谷がある。しかしながら、蘇峰はこれらの人間に狭く紙面を閉ざすの愚舉には出なかつた。これは忍月に對しても同様で

ある。従つて、あるものはたゞ忍月自身がわれとわが身の置き場所に困じたのだ。江湖新聞は百六十六號まで續いたが、雪嶺の手中にあつたのは八十九號までで賣行不振のためと思われるがあとは他人の手にうつり、當然忍月も退社した。『國民之友』客員の位置に依然としてありながら忍月はゆきづまつていつた。やがて、村山龍平が新聞國會の計畫を起すや、自然に忍月が誇られて行くのもそのなりゆきは理解できる。

かくして、『うたかたの記』の批評を『國民之友』九八號に載せたのを最後として、忍月の筆はあらためて、十一月二十五日の國會第一號に「詩美人に逢ふ」をもつて登場し、民友社と縁が切れる結果となつた。

ここに魯庵が『國民之友』にクローズ・アツプされざるを得ない道理がある。魯庵は忍月の名が消えるに先立つ九七號より特別寄書として「見聞の儘」を書きはじめている。翌年一月の一〇六號まで書きつゞけられたこの隨想錄は三十二年九月、『文藝小品』刊行の際に加朱修正を加えて「綠蔭茗話」として收められたものである。やがて一〇三號に三味の『かつら姫』を評し、一〇五、一〇六號に「詩辨」を掲げるに及んで、完全に忍月にとつてかわるに至つた。

一體、魯庵と忍月とは二十年代の批評界にあつてはもつとも典型的な評家と稱してよいものではなかつたか。後代に及んで、小説の紅露、評論の追鵬とすぐ考えられやすいのだが、純粹に評家としてみるべきは不知庵に忍月の二家である。逍遙が『小説神髓』以來二十年代をリードする寫實の旗幟を掲げ、『早稻田文學』を自己の機關とした點は巨大な存在であり、もと一介の文學書生たるに過ぎない魯庵の遠く至らざるところと認められるが、しかし逍遙が『書生氣質』以下に實作者としての名を得ていたことは、讀賣新聞に寄稿した文藝時評の働きを薄いものとした。世間は春廬屋隴を作家とみなし、逍遙を英文學者と考えていた。鵬外の場合はどうか。森林太郎が小説論を世に示したのもはやかつたし、『しがらみ草紙』を主として堡壘とした砲撃に震撼させた威力は絶大であり、『審美綱領』著作の存在は優に神髓を壓するものがあつた、にもかかわらず鵬外漁史は『於母影』『舞姫』以下の作家と

して世間を衝動させていたので、忍月がレッシングやシラーを読みかじつていただけのロマンチークを遙かにぬきこんでいたのは當然ながら、鵬外は時評家として考えるわけにいかない。

このように追鵬二家を別格とすれば、綠雨醒客や謫天情仙をこえて評壇の相對する雄とみなされるのは魯庵、忍月にはかならぬが、この兩者の關係をみると、興味深いものがあらわれてくる。まず兩者は必ず雁行の關係をもつたことである。女學雜誌社と民友社においてそうであり、國會についてみてもそうである。後年、忍月が『新小説』に返り咲いたのを追いかけて、魯庵が博文館と特殊な事情をもつに至つたこと、忍月が小説を書いて失敗したあとに魯庵も實作に手を染めたこと、忍月が文壇を退き俳句に沈没したる後に魯庵も批評の第一線から身を引いたこと、これらはすべて對照的であり前後の雁行關係があると考えられる。まして、忍月のドイツ文學と魯庵の英文學と主としてその素養とした外國文學を訪ねるときは、あきらかに對照の妙が感ぜられるのだが、今はもう書くことをやめる。

結果として、魯庵と忍月との優劣を定めることは、まんざら興味なくもないが、やはり愚だらうと思う。その文壇的生命に長短があつたからである。忍月の評家たる存在意義は二十年にはじまつて二十三年半ばにして終つた。二葉亭の『浮雲』『あひよき』等への批評が果した役割は、當時の批評文が芝居の一口評みたいなものでがち・見立て・穴さがし・仲間褒めに終始した有様から群をぬいて、文壇、讀書界を啓發した露拂的な意義としてみることができ²る。才氣もあり時代感覺もするどく、加えて分析的論理思考力もあつたが、しかも短命であつた。いや短命にさせた理由があつた。

忍月が大正十五年二月没した後、魯庵は昔時を回顧し述べている。³魯庵が忍月の挫折頓挫の理由として説明するところは四點ある。第一は、同じドイツ畑からの鵬外の出現で、レッシング一點張りなのにくらべて、鵬外はレッシングはもとより留學仕込みのハルトマンまで援用し切れ味を示したこと。第二は、忍月の文章が無味乾燥、生硬

蕪雜であり奥行も浅い論理一遍のもので、隅外とくらべて世間が飽きたこと。第三には、忍月の書いた『捨小舟』などの小説の失敗で、行司が相撲を取るような愚擧だつたから、批評の力量まで疑われたこと。第四に法科の學生で文學は道楽であり、文壇の抱負もさして持つていなかった兩棲類的存在でしかも隅外ほどの懸命な努力を怠り、地方に去らねばならなかつたこと。かくて魯庵の感想は、「忍月は本來が社會人で物質的成功以外に慾望は無かつたので、文壇の成敗などは餘り關心しなかつたらう。西隅の一地方にせよ、お山の大将となつて相當門戸を張つてゐた忍月は恐らく帝都の文壇を白眼睥睨して、我々如きイツまでも文壇の足を洗ふ事の出来ないものを憫笑してゐたらう」としるし終る。實際に東都の新聞は忍月の計には一行だも割かなかつた。魯庵の死の前後の夥しい記事に比しては驚くべき相違であつた。が、その魯庵も今日においては――。

魯庵は感想においては全然没自己的であつた。が、事實はどうであつたか。私はさきに雁行したと書いた。忍月が批評の筆を絶つたのは、もちろん、本名石橋友吉が大學法科を二十四年七月卒業することにもよる。が、私は『文づかひ』をめぐりまたしても隅外にやぶれたことの上に、魯庵の評家としての名聲に蹴落されたことをみなければならぬと思つてゐる。隅外は努力の人だつた。しかし、魯庵も努力の人だつた。もし、魯庵が二十一年末のデビュ當時のままであつたら、結局は忍月同様發展のなかつたことだつたらう。英文學の素養の上に、佛、露、獨の大陸文學に觸れ、文學の眞義を求める魯庵にたいして、アリストレスとレツシングとでは、常に新鮮というわけにかなかつた忍月の悲劇がある。

いささか寄り道がすぎた。

『國民之友』に據る魯庵の批評活動は三期に分つことができる。第一期は二十三年末から二十五年初、第二期は二十六年夏の寄稿、第三期は二十八年である。このうち、第二期と假にしたのはあまり意味のないことも言えるから、むしろ省いた方がよいかもしれない。第一期と第三期との間を隔つものは、魯庵の生活と仕事と双方にまたが

る苦痛と呻吟である。この章では第一期としたところを概見してみよう。毎號の短評や隨想を省けば、もつとも意味のあり、魯庵を代表する評論は「詩辨」と「鑒庭簞村氏」であろう。

「詩辨——美妙齋に與ふ」は副題からも明かな通り、美妙への論難である。美妙は『國民之友』に九六號から一〇七號まで八回にわたり「日本韻文論」と題して長大な日本詩歌の韻律の考察を押し進めた。これについて、まだ雜誌の上で完結をみぬうちに矢つぎばやに批判があらわれ、その先頭に魯庵が立つた。その第一着は國民新聞十一月二十二日に路功處士と名乗つた「外形論者」だつたのである。次に來たのが『しがらみ草紙』の第十四號に忍月が美天狗と署名しての「韻文論を嘲る」だつた。

美妙のいきごみはすさまじいもので、なにせ膨大な分量からなつてゐるから、これを詳細に紹介するわけにいかないが、その概要は(1)文は散文と韻文とに分たれる、(2)その相違の根本は節奏の有無にある、(3)韻文とはポエトリのことである、(4)殊にわが國では餘情主義ともいへば曖昧な表現を尊重する傾向に災ひされた、(5)この弊を改めるには厭世的鐵腕な思想を否定する韻文を否定する要あり、(6)その方法は韻文の體裁を改めることで、日本語を考察して語の長短高低に従い、韻律をきめ押韻などを育てる要がある、というもので實際にさまざまな検討を試みたものである。

この論に對して放つた路功處士(魯庵)および美天狗(忍月)の批判は全く同じ根據にもとづくものと言つていい。魯庵は「詩格を喋々するものは是を文法家と云ひ文格を嘯々するものは是を文章家と云ふ、共に純然たる詩人にあらず。今の文界何ぞ文法家と文章家の多くして純詩人の少きや」と言い、忍月は「氏は舊に詩の形體のみを視て、而して人と宇宙と美と連絡して、其間に詩なるものゝ振動することを視ざるなり(中略)氏は修辭學的の眼を以つて詩を視、而して詩學的の眼を以つて詩を視ることを知らず」ときめつけたのである。滿々たる自信をもつて書き出した

美妙はすぐさま反駁を加えた。魯庵に對しては、「路功處士といふ變なる外形論者」(國民新聞十一月二十三日)、忍月にむかつては「美天狗氏に」(『しがらみ草紙』十四號)がそれである。美妙の言い分は、現代において詩の素材となる思想とその他と區別はない筈で、それを立てようとするとかえつて傳統的形式的になるのではないかと言うところにあつたようだ。

私は忍月と魯庵との意見がほぼ一致していると書いたが、それは内容尊重の立場といふことができる。忍月は「詩歌の精神及び餘情」(『國民之友』六九號)ですでに「詩歌に精神なく餘情なくんば、如何に綺語華文を并ぶるも吟味贅嘆の妙なかるべし」と説いて、外部の調和たる格調と内部の調和たる精神とは詩歌の二美だが主として意を注ぐべきは後者である、というのは精神によつてこそ眞理が發揮されるからと述べていた。それよりもはやく、魯庵が「詩文の感應」「文學の紛飾」の二論文で詩歌を風姿と風情とに分け、形式面の風姿至上をしりぞけて内容たる風情を尊重すること、そこに享受者の感應も生れるとしていたことは先に述べておいたところである。魯庵が俳諧用語をもつて説明したところを忍月が美學用語をもつてしたること、魯庵が實朝、俊成、芭蕉を重んじて定家や其角その他をしりぞけたこと、忍月が餘情、幽玄の語を力説したこと(この主張は國外の「答忍月論幽玄書」によつて反問されている)などにそこばくのニュアンスの相異はあるにはあるが、もともと美妙や紅葉らの硯友社連をはじめとした文章の技巧彫琢に走る傾向に、批判的であつた二人にとつては形式を輕んじ内容を重視するのはむしろ當然のことだつた。

美妙もそのことは知つていた。その上に、さらに一撃を加えたく思つたのは『出版月評』三四號にF・C・Aなる者が「葉末集」の批評を書いている文章であつた。これが魯庵であることを私は書いておいた。F・C・Aはポエムとノーベルとの差異を着眼點にあると暗示したが、美妙はそれをポエトリーとプローズとの差異と受取つたのである。

してみれば、この経緯から言つて魯庵がさらに自己の立場を敷衍する大論文を執筆する必要を感じたのは自然であつて、そこに「詩辨」一篇の成立の根拠があつた。魯庵の文章の主張するところは、變らないしその限りでは重複を免れることができないが、注目すべきは魯庵がいやおうなしに詩の本質について自問自答して出したところのものである。

(前略) 詩の要素は聲調節奏外の或る一種のものにして我等頗る其解釋に苦むと雖共若し此要素たる或る物を缺かば聲調節奏は美なりと雖ども詩と云ふを躊躇せざるを得ずと曰へり。此所謂或るものは詩經の序も古今の序も杜撰淺薄なりと一喝せし美妙が二年間研究せしも猶ほ悟る能はざりし或るものにして、ブレット以來諸の學術進歩せし中に「詩とは何ぞや」の疑問未結して解けざりしも詩に此或るもの即ち不言不説の妙想あるが故のみ。(傍點—魯庵の原文のまま)

「或るもの」とは魯庵も苦しい。率直に言つて、魯庵の思考がそれより前進できなかった弱點の吐露にはかならぬ。サムシングに歸してしまふのだつたら言わない方がましなくらいのものである。しかし、私はそうは思わない。こんな平凡なことを正直に言つておいたからこそ、後の成長もありえたのだと思ひ、そういうところで、生半可に西洋美學の見解を借りてしまつた忍月よりはすくなくも良かつたといえたと斷じたい。さらに、

詩は文字に在らず節奏に在らず極端に曰へば一篇の詩を作らざるも猶ほ詩人、萬言の句を吐くも却て是れ非詩人。文字節奏ボエトリに於て何か有らん。ムアは絶叫して曰く若しバークとペーコンを詩人ならずと云はば余は詩の何たるを知らずと。

と書き、「噫、山田美妙子、君はライミストの聲譽を買得て揚々たる乎。來れ教へん、ライミストとは poor poet の義なる事」と結ぶとはひどく威勢がいいものだ。實際は魯庵がこんなことを言うのは褒められたことではないと思つてゐる。けれどもそこは魯庵の文章力の勢いというものがあつてのことだろう、美妙の立論は世間に輕侮の念を招いてしまつた。美妙の韻文論が冗漫なデス調で書かれて迫力に乏しいということもあつたが、啓蒙期が早や去つて時代は日本浪漫主義の高潮を迎えようとしていたときだつたから失敗したのだと考へた方がよからう。というのは、美妙の見解には、社會の發達につれて韻文の美の規準も變遷することを指摘し、日本語の音樂性の問題を

追求したところから、短詩型の餘情を否定し、長聯の韻文體を指向するなど、きわめて多彩な提起があつてその包攝するところに聴くべきものがあつたのだが、なにしろそのままでは「夫レ明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ」と高唱し、押韻、用語までもやがては期した『新體詩抄』の作者たちと發想の點でさまで距離遠くないところに美妙があつたと感じられたのである。ここに至つて、かつての歐化主義の早産兒は時代遅れのモダニストに變じたとみられるのも致しかたない仕儀であつた。

かくて、美妙の論にとどめをさすのが『しがらみ草紙』二五號(二十四年十月)に「美妙齋主人が韻文論」を掲載した鵬外であつた。美妙。魯庵論争の一年後である。鵬外の精緻な追求は、美妙が句や語が節奏をもつに至つて韻律をなすと言つたのは誤りで、語が句を成したとき韻律がおのずとなされるものだと言き、日本語の抑揚はヨオロツパ語と違つて勝手であるから律格制定は所詮不可能だと指摘し、また詩人は心の相に浮かんた語をもつて詩作するので美妙のいうように餘情が注釋だというようなことはない、とまで及んだ。「美妙齋が韻文論は、韻文をくみ立つる法を説きたるなり、韻文をくみ立つる法は純然たる詩形の詮議にして、能く詩の用をなすものなりとはいへども、畢竟詩の本質の外にあり」と結論している。この鵬外の明晰な論理はもちろん其の下敷にハルトマン美學があつてのことで、その點に忍月や魯庵がよく及び得なかつたところがある。⁴

ついでに記しておきたい。魯庵が「或るもの」というかたちでしか示し得なかつたし、社會發展による變化に眼をむけ得なかつたとしても、それはあくまで二十三年末の段階においてのことだと注意しておきたい。魯庵はこの弱點を自己のうちに責めていくのである。そこにヘーゲルやベリンスキイから學んで『文學一斑』に體系化し定義づけることを可能にした。「詩辨」よりのち一年半である。「詩辨」一篇はその意味で、魯庵のうちの道程標と理解することができる。

さりながら、魯庵にとつて名譽ある批評活動はやはり「饗庭篁村氏」を措いてはほかにない。「饗庭篁村氏」は

『國民之友』の一一〇・一一三・一一四・一一五・一一七・一一九各號の全六回にわたつて連載された。逍遙、鷗外のごとく自己の評論機關を有しない魯庵にとつては客員たる便宜を利用しながらも、たいへんなことであり、はじめて月評家以上の筆をふるつた、質量ともに文字通り出色の文章である。

もと、魯庵が篁村を評したのはここにはじまるわけでない。眼についたかぎりを拾えば、「篁村先生の『掘出し物』」(『女學雜誌』一六七號 二十二年六月)、「篁村先生の小説(『むら竹』一篇及二篇)」(『女學雜誌』一七四號 二十二年八月)、「篁村先生の當世商人氣質」(『女學雜誌』一八五號 二十二年十一月)、「饗庭篁村先生の文章」(『女學雜誌』一九二・一九三號 二十二年十二月)、「勝関を讀んで篁村先生に與ふ」(國民新聞 二十三年六月一日、二日)などがある。篁村が根岸派の雄であり作物が多いとしても、なお紅葉や露伴のごとき新進流行作家に比すれば、さまで問題視すべき作家とはちよつと考えられない筈である。そうとすれば、この夥しい篁村先生に對げられた評文の數々は奇異に感ぜられよう。

が、これには理由がある。その第一は、篁村が紅葉、露伴らの新進作家をも寄せつけぬ文章の大家だつたことである。「今は更に聞えざれども一時は篁村宗とまで歌はれし饗庭篁村氏は明治の亥年頃より振假名新聞の雜報を擔任して折々短篇(ハヤシ)を物されしが、其頃は柳北、魯文、撫松、橋塘等の文名高くして氏の名を知るものなかりき。此時分より余は其尋常ならざる文才を喜びて日々の新聞を切抜き手箱の中に收め置きしが後氏と相見し時因縁淺からざるを語合ひたりき。然るに森鷗外氏は篁村文愛讀者の一人にして何事にも丹念なる氏の常として日頃讀賣新聞を切抜き置きたれば叢竹編輯の時は氏のスクラップ、ブックより補ふ處少からざりしと」(『見聞の儘』)と書いているところからも魯庵が篁村の文章を認めたはやさは知られようが、さらに「小説界に於ける文豪は篁村先生なり。若し明らさまに云へば今の西鶴派の人々即ち紅葉露伴愛鶴軒の諸氏は先生に劣らざるの文字を作れど、なほ余の先生を以て文豪となすは、よく練達成熟して流麗圓滿なる故なり、殊に諷刺(オウチ)に富んで字々針砭を食むは當代第一人と云ふ

べし」(「饗庭篁村先生の文章」)で、かれの惚れこみようはわかるうが、また同時に理由の第二としては、篁村が自在な諷刺諧謔の文字をふるえる稀な存在だつたことも證しされている。篁村は愛鶴軒寒月が西鶴の再發見と紹介とを行うに先立つて西鶴を知り、また近松巢林子を識つた元祿文學認識の先驅者だつたが、同時に其碩の八文字屋本を深く愛し、その文章の特徴をよくとらえて、自身の文體を創造した。魯庵がフルベツキや中村敬字によつてアデイスンに眼を開かれ、すすんでアデイスンとおよそ對蹠的なスウィフトも知つて諷誡文學のなかに自己の喜びを見出したのは少年時であつたから、その和製版として篁村に親しんだのも自然な成行きとみられるのである。湯島聖堂の圖書館においての八文字屋本耽讀も魯庵が篁村文學を解する助けとなつたのはむろんのことだ。あらゆる意味で魯庵ほどに篁村文學の批評を行つて適切な人間は居ないとおもつて差支えない。

それにしても、文壇に登場したての魯庵が篁村を批判する手つきは必ずと言つてよいほど其碩と對照し、アデイスン、スウィフトと比較するに終つていた。しかし、小説が遊戲文字であるわけはないと立場を明かにしたときからの魯庵は、いつかは篁村を全面的に超える追求を行う要にせまられていたと言つていい。『勝閑を讀んで篁村先生に與ふ』は『勝閑』が珍らしく篁村の時代小説であるためも手傳つてもともと失敗作だから、魯庵がことに言及するまでもないほどの批評だが、そのなかで「苟くも文學家と世に推尊せらるゝ者若し一時の快を拂はんが爲洒落半分に筆を弄する事あらば世は文化文政の戲作時代に復歸せん。滑稽（きやく）なるも俳諧（はいかい）的なるも諷誡（ふうがい）的なるも文學者の筆は常に眞摯なるべし」としたものは追究の出發線上に立つたものというべきだつた。

さて、「饗庭篁村氏」は、篁村が短篇集「むら竹」二十卷完成を機會に豫てよりの批評を集中的に行おうとしての態度がはじめに闡明される。煩を厭わずつづさに魯庵の文章をみてゆこう。

篁村が明治初年の操觚界に崛起してより今日に至つて魯文や應賀以下の諸氏を壓倒し去つたのは何故か、それは開化文學が馬琴、京傳の亞流でしかなかった當時に西鶴、其碩を涉獵し限識の高きに負うものだ。ところで世間は

簗村を目して明治の其磧と稱す。其磧が西鶴を學んでしかも一家をなしたところは、到底に自墮落、風來、京傳、三馬、一九、鯉文の及ぶところでない。個々の面ではかれらに譲つても社會の裏面を窺ひ、人間の暗冥を照し冷然苦笑のうちに平淡な文字を綴る妙を推したいが、なおアデイスンの如き道德的諷刺家といえない。簗村が『當世商人氣質』で悉く其磧を模したところから明治の其磧というのは誤りである。簗村の傑作は『商人氣質』でも『掘出し物』でも『勝鬨』でもないからだ。簗村はまさしく簗村宗の開祖だ、そこに『むら竹』の特色が光る。其磧は偏見をもつて人生の美に同感しなかつたが簗村は異なる。ただ簗村は往々勸懲に傾く嫌いがある（以上第一回）。簗村の面目は短篇にある。精密に言つて小説イタベと稱しがたいものだが、しかもその深刻な冷罵こそ秀逸なのだ。たとえば「三筋町の通人」「駈落の駈落」「俳諧季違ひ」「藝が身の毒」「文の間違ひ」「俳優氣質」にみられる世の半可通にたいする嘲罵の文字をみよ。腦中一物もなく耳學問に安んじて古器古書畫に風雅を衒い變物畸人と呼ばれることを願ひ遊戲三昧する半熟の通人こそ、簗村のもつとも精妙に描き得た活人物なのだ。それに比して簗村の紹介しようとする理想人物は「窓の月」「掣ヒキ撲み」「縁の糸」「苦樂」などにみえるが、容姿よく學才あり趣味上品で家業怠ることなき圓満の男子だが、これはまた木偶のごとき感じを受けるのみだ。思うに、この木偶が活現力を得るとき、それはたちまち半可通になるのではないか。さすれば簗村は唯一箇性格のみ描寫したというべきで、それも通人社會を貫く心裡を洞察するに至つて得ないというべきである（以上第二回）。さらにすすんで、簗村の描く惡人善人をみれば簗村がつくりあげたは畢竟惡人らしき惡人、善人らしき善人以外ではなく、そろいもそろつた小人であり好人物であり、女性に至つては全くお古いといわざるを得ず、ただ簗村が成功したのは「三筋町の通人」という一箇の性格のみ。しかも憾むべし、表面の觀察にとどまつた（以上第三回）。一體、わが國の滑稽と稱するものは卑俚猥雑な脚色をさすことが多く、英國のユーモアあるいはサタイアを考察して知られるところと格段の相違がある。アヂスンのヒューマニティに滿ち眞摯シンシな態度、スウィフトの深刻な厭人的イノミヤミからの反語、この二者の全く相反する性格も

その底に流れるのは人性の隠れた面を觀察してその心情の機微を追究して讀む者を感動させる力がある。それに比すれば篁村の諷刺は浅い（以上第四回）。つまるところ、眞の諷刺は客觀的描寫に加うるに主觀の眞實があつて成立する。英國作家の紀行文がよく社會の裏面に迫つたにくらべて篁村の旅行記がただの漫遊記錄に終つたのも偶然ではない。篁村には社會的觀念がゼロだからである（以上第五回）。篁村は書齋に閉じこもらず楊弓店や下等料理屋やなどに自ら實驗するところがあつたという。それは結構なことだが社會的思想の薄いものは深く眞相を透視し得ず、淺薄な批判と經驗のもたらす妄想を繰返すにとどまる。現今の世が文明進むとともに經濟上の不平均は貧富の差を大きくし、人權論四方におこつて壓制主義を排し、世界交通廣まつて歐亞に修羅を現じようとする時代であることを忘れてはならぬ。

社會的思想あつて能く人事を觀察すべし人事を觀察し得て能く社會的思想を善ふべし。此二者は互に相俟つて離れざるもの、未だ社會的思想あつて人事を觀察せざるもなく人事を觀察して社會的思想を養はざる者はなし。（中略）

何人も皮膚を傷ければ必ず痛苦を感ず、感ぜざる者は唯瘋癲白痴と神經麻痺の者のみ。若し然らずして更に感ぜざるものあれば他に一個の能なしと雖も余はその凡常に超越したるを承認せむ。疑ふらくは寒暑を感ずる人能く己れの血を見て痛苦を感ぜざるを得るか。

余は常に篁村氏の才思に服する者にして人に會ふ毎に文の妙を嘆々して措かず、氏が今日の文界に立つて勿論一方の將材たる事を信ず。然れども氏が社會的思想の那邊に在るに到ては茫乎として鈍眼未だ知るを得ざるなり。

と、これが魯庵の結論であつた。

喋々二千言を費して、「饗庭篁村氏」を概描するのは當を得なかつたとのそしりを受けるかもしれない。が、私は無駄とは思わぬ。

無駄とも思えそうなの紹介記述を讀んでもらえば、魯庵が行つた篁村批評の意味がおのずとあきらかになると信じたからである。「饗庭篁村氏」が明らめたのは次の諸點である。

篁村を本當に知るものは篁村でもなく、勿論世間でもない。其礎を模した『商人氣質』も巢林子秋成を模した『勝閑』も、篁村の眞骨頂ではなく、『むら竹』の短篇が眞に篁村のものである。だが、この短篇中でも眞に生彩を放つのは、篁村の創造した半可通以外ではなく、他の性格は悉く失敗で模型類型に過ぎない。しかも、その半可通人ですら表面的觀察からした諷刺にとどまつて底が浅い。その理由はどこから來たか。篁村の諷刺には人生に對するシリリヤスな氣分がない。それはいかにして得られるか。すなわち深刻かつ痛切な社會的思想あつてはじめて可能になる。社會と自己の關係に思ひいたつて、それを胸中に養うところからはじめるべきである。

言わば、これだけのことである。ああ、これだけのことだつたら、私はなんと迂遠なペンを走らせたことか。しかし、そんなことはない。

魯庵が「龔庭篁村氏」を草したのは、たんなる批評上の仕事であつたのではなかつた筈である。魯庵のこの文章は一個のたたかいであつた。たたかひの敵は、篁村であり世間であつたが、同時に深く自己自身の膚肉に突きさす自己へのたたかいでもあつた。魯庵がいうように「從來我國の詩文人は大抵自己の小世界に住して自然の風色を愛する外は毫も社會的の觀念を蓄へざりき。身は如何に脱俗せんとするも自づから社會の網網中に束縛せらるゝに係らず猶ほ社會の事物に痛痒相關せざるが如し。彼等所謂詩人歌人俳諧師等敘情詩人に屬する者は尙ほ可なり、人事を詠ずる小説家も材を求むる處此社會を外にして何處ぞや」と言わねばおれぬ傾きが、この明治二十四年にしてあつたことが、魯庵のたたかわねばならぬ必然を物語る。もとより、魯庵の指摘する、人間の社會性の觀念がふかぶかとした考究に支えられていたかどうかは私も疑問とすることができる。あるいは啓蒙期の社會學——スペンサー流の——から受けた影響から脱しきれない態のものであつたともおもえる。しかしまたそれにとどまるものでもない。外山、山や加藤弘たちの啓蒙家が社會進化論を優勝劣敗法則に結びつけて理解していたときに、魯庵は十九世紀社會をふりかえつて「兎に角痛切なる人事の四方を圍繞し刻々迫り來るに當り、外界の刺激に極て脆き人間

として焉んぞ虚心たるを得んや」と意識していたのであつたから。魯庵がユーゴ、トルストイ、ドストエフスキイ、ディケンズ、ゴッティを引いたのも、ただおのれの博學を誇ろうためではなかつたのである。魯庵のたたかいの性質はこのようなものだつた。

しかし、そう言う魯庵がまた長い年月、篁村の文章を愛し、篁村の諷刺を痛く好んできたのだつた。「饗庭篁村氏」を仔細に點檢すると、魯庵が篁村を叩こうために叩いたのでなく、魯庵自身がいかに篁村文學に愛情を持つてゐるかが感じられる。「旬餘病に臥し全く筆硯を癢す。枕上横むところ新刊の小説多くは流讀一遍すれば再讀を欲せざるもの、獨り叢竹に到ては一讀又二讀、興益々熟して倦厭終に來らず」と率直にかれは書いてゐる。それ程の情を注いだ篁村文學であればこそ、魯庵はおのれのうちの篁村的なものと對決する必要にせまられたともいえる。魯庵が諷刺を痛く愛したこと、戯文『文學者となるの法』を草し、『社會百面相』を綴つたこと、それを別としても、性來の氣質、環境の不遇、それらによつて皮肉屋の面貌がうかがわれたことの一半はさきにもしるし傳えたところだつたが、そのようなおのれ自身の淺薄さを克服する仕事として選まれたのが『むら竹』の批評といえた。ましてや、篁村の描く半可通人は魯庵が自己をふりかえるにそれだけでも値したしろものといえたし、それを解剖していつたところに魯庵の自己批判が成立したのではなかつたか。

魯庵が『罪と罰』に出會した二十二年夏以來、あるときは善治の倫理的浪漫性を批判し、あるときは露伴の觀念性を支持し、あるときに美妙の外面性を衝いてきたのだが、かれは『罪と罰』が自分を動かした思想を、社會的思想という言葉によつてもかくも一たんの決算をしたとみてとれる。これによつて、諷刺の段階が一步こえられたといつてよく、もはや魯庵はこの言葉を用いなくなつたのも當然であつた。この魯庵のみちゆきを支えたものに官報局時代の二葉亭の存在があり、松原岩五郎や横山源之助があつても一向に不思議はあるまい。「饗庭篁村氏」の一文に魯庵が用いた「觀察」の語が、二葉亭その人の好んでつかつたところであることから推量するに足る。し

かも創作の筆を絶つて官報局に勤務する二葉亭が下層社會探訪にさかんな興味をもつていたこともなにかつながらところがあるのだ。魯庵がこの文章を書いてから後のことになるが、二葉亭の周圍から松原岩五郎がのちに『最暗黒之東京』（二十六年一月）にまとめられたルポルターージュを國民新聞に掲げたし、横山源之助が『日本之下層社會』（三十二年四月）に收める諸篇を毎日新聞に記録したことを思いあわせるとよい。ただし、大我居士といった櫻田文吾は『貧天地 饑寒篇探検記』（二十六年六月）にまとめた文章をはやくも二十三年八月——九月に新聞日本に連載していたのであり、私などは、ことによれば二葉亭もロシア文學の影響もさることながら、この大我居士のルポルターージュなどに刺激されるところがあつたようにも思うのだ。官報局長の高橋健三は杉浦剛と親しく、政教社系の思想の持ち主とみられるが、二葉亭は高橋を敬愛していたからである。

政教社といへば、陸羯南、志賀重昂、三宅雪嶺のこのグループは雑誌に『日本人』——『亞細亞』をもち、新聞に日本（菊南主宰）および短命だつたが江湖新聞（雪嶺主宰）を機關としてその主張を表明していた。ここで私がとくに觸れておきたいのは江湖新聞に據つた長澤説のことである。長澤は別天樓主人と號して、のちにアメリカに渡り、歸國しての「社會主義一斑」（二十七年三月十五日『日本人』）の貴重な紹介を行つたものだが、江湖新聞紙上での活動も注目に値する。「明治年代の新詩學」（三月十八日）、「現代の文體」（四月一日）、「新詩學に注入すべき一要素」（四月十三日）、「詩論一斑」（五月十日）などにその主張の概觀をみることができが、なんといつても注目に値するものは、それぞれ三回にわたつて連載した論文「貧民と文學」（四月二十九日—五月一日）と「文學の革命正に迫る」（五月二十二日—二十五日）とである。その主張するところは、貧民のために熱涙をそそぐ文學者が出現し、在來の箱庭文學に大革命をもたらせよと言ひ、その根幹は文學において思想を重んずべきだと述べるにある。かれが和歌俳諧漢詩の傳統的詩型と雅語を排斥し、平易なる語によつた新詩體を推したのは當然である。思想的には、ミルトン、バイロン、ユーゴ、ルソー、エマースンを言うところからみて、もちろん浪漫主義に立つ。私は、かれの文學觀は三

宅雪嶺の影響下にあるとみているが、この國の浪漫主義文學を論ずるには決して無視し得ない存在だと考えている。して、この別天の存在は、魯庵の主張と比較して、思想を強調する上でふれあうことのできるものであり、さらに社會と文學との係り合いを説く上からも考慮にいれることができるのだ。ただし、魯庵は別天の論がよつてきた詩人群とは異なる系列から到達していたし、また別天よりはるかにぬきんでた重厚な詩眼と識見とを得ていたのだつた。「饗庭篁村氏」一篇は、魯庵の資性の發展と、時代の胎動とがややしくも交差する地點に成立していることをいうために、私は例の如く蛇足を書きくわえてしまつた。

ついでのことにつけくわえる。文章の上ではいかにきびしく論破するとても、日常生活にあつては結構交情篤いという風は、この時代の文壇内にあつては當然のことで、魯庵と篁村との關係もまた別のことではなかつた。相互の往來、書面の交換の頻繁なことは現に残つてゐる書簡や、魯庵の日記の上からも判斷できる。竹の屋は魯庵より一まわり以上も年長でありながら、批評が手厳しいと驚いて音をあげたり、夫人に去られたといつて嘆いたりしてゐるのをみても、その親交の程が想像できる。

註 * 1 長澤別天の本名は説。慶應四年（明治元年）五月一日土浦藩士長澤岩五郎の長男として出生。明治三十二年十一月二十二

日肺結核にて死去。父が江戸詰だつたところから東京で育ち、江東義塾に學び杉浦重剛、陸羯南らの政教社に投じたが、二十四年夏渡米し二十六年歸朝。その後「山陽新報」の主筆を経て三十一年八月、「東京朝日新聞」に、陸羯南、高橋健三、三宅雪嶺の推挽によつて入社。筆名に別天樓主人、金毛獅、坂東太郎などがある。『冒詩人』、『ヤンキー』等の著がある。（昭和三十年七月二十五日「朝日社報」第四四五號参照）

* 2 忍月の批評活動をはじめて研究した論文は、久松潜一博士「石橋忍月の小説論」（『國語教育』昭和二年四月）であり、久松博士の『日本文學評論史・近世最近世篇』の概括は忍月の史的位を定めた。

* 3 「病臥六句」大正十五年六月『中央公論』所載。

* 4 「韻文論」論争に關しても、久松博士「明治時代に於ける詩歌論の發達」（『明治文學』昭和四年七月）にあらわれ、『日本文學評論史』の記述が當を得た紹介となつてゐる。最近では、吉本隆明「日本近代詩の源流」（『現代詩』昭和三十二年九月）

三十三年二月連載、『抒情の論理』所収)のハ、美妙・魯庵・關外論争Vに詳細に取りあつかわれ、妥當な見解が述べられている、参照されたい。

* 5 「三筋町の通人」は『むら竹』第四卷所収。その半可通の描寫をこころみに描出すれば「石榴はボント膝をはたいて其手で腰の烟草入を抜きトキニと云ふをキツカケに、音のする角彫の筒より早いを自慢が脂止めの煙管を取出しソレ君も御承知のと云ひかけて手烘りの火鉢を引寄せ例の隠れ家へねで切つて煙草を吸ひ付け火鉢の縁をトント叩いてドウモ君に見せたい煙娟窈窕たる者が願はれやした實にお目に掛けたいよと云つて羽織の紐を結び直す眞似をしてわざと跡を言はずに澄し切つて居るといふ」ような調子。徳田秋聲の自傳的長篇『光を追うて』にも、この「三筋町の通人」愛讀のことがみえている。参考までに。

附記

一、本稿は「讀書人の育つた環境」(青山學院女子短大紀要第二十輯)、「不知庵と『女學雜誌』」(青山學院女子短大紀要第二十輯)の續きである。

二、本稿は、内田魯庵傳の覚え書という意識で草しているから、評論壇の批判的研究とは別になつてゐる。その方面については幾つかの拙稿があるがここでは略したい。

三、昨年の「不知庵と『女學雜誌』」において校正上の誤りと共に、原稿執筆時の誤りがあつた。柳田泉氏、十川信介氏に御指摘を頂戴した。謝して訂正したい。64ページ10行目の末尾に「が、これは魯庵の記憶違い。」と補う。同11行目の「藍泉」を削除。86ページ11行目「二葉亭に先立つて」は「二葉亭に遅れて」であつた。